

24 大中年間の中央歳計數字は更めて詳述する。

25 新唐書<sup>卷五</sup>食貨志・鹽法の項。此の三倍が今の三倍か、四倍の意味か、今の所断定出来ない。

26 註(3)の論文。

27 資治通鑑<sup>卷三</sup>三同年十二月の條。

28 兩稅上供の最初の元額たる錢九百五十餘萬貫・米麥二百餘萬石が裕りを含む設定であつたことは、註(3)の論文に考證してゐる。

29 應在は宋代に入つて一層複雑化したと見えて宋代の應在なる用語の意味内容は唐代のそれよりも複雑となつてゐる。

30 此の留使對策の内容は註(2)の論文にその中心目的として詳論してゐる。

(九州大學教授)

### 第二十四回國際東洋學者會議について

一九五七年八月二十八日より九月四日まで、西ドイツのミュンヘンに於て、第二十四回國際東洋學者會議が開催されたが、この程ミュンヘン大學のH・フランケ氏より、そのスケヂュールと名簿が送られて來た。これによると會議は次の十四部會に分れて行はれてゐる。

藩鎮體制下に於ける唐朝の振興と兩稅上供 日野

る。

(1) エジプト學

(2) 契形文字學及び近東考古學

(3) 舊約聖書、聖書考古學及びユダヤ學

(4) キリスト教時代の東方及び東ローマ

(5) セム學

(6) イスラム學・言語學及び文學

(7) イスラム學・宗教、歴史及び藝術

(8) トルコ學

(9) イラン、コーカサス及びその近邊

(10) インド學

(11) 中央アジア及びアルタイ學

(12) 東アジア・(a) シナ

(b) 日本及び朝鮮

(13) 東南アジア

(14) アフリカ學

なほ第十三部會の東南アジアと第十四部會のアフリカ學は今回新たに設けられたものである。

我が國よりは、東アジアのシナ部會で田村實造・小林高四郎、日本及び朝鮮部會で中山正善、新設の東南アジア部會で山本達郎・大林太良の諸氏が發表せられてゐる。(松村潤)